



二島城下町今昔物語

にげなく通っている場所も、城下町であった時代は、川の顔がありました。当時の様子を想像して通るのもかもしれません。

河口は三角州(デルタ)で、広島城築城以前呼ばれる村落がありました。山間の吉田郡していた毛利輝元は、この地が水陸交通にことに着目し、天正17年(1589)に一角に城地を定めました。当時は低湿でも定まらず難工事を余儀なくさせられ天正19年(1591)に輝元は112万石余城しました。

張は京都の「聚楽第」を手本に、城下の町割を真似たといわれます。城下町の建設は「目御門)より南へ延びる白神筋を基準に田川や運河も南に通じていたために、町並み沿った「縦町型」となりました。城郭を取り武家屋敷が配置され、町人町は南西部に下町の骨格ができました。

合戦後の慶長5年(1600)に49万石の入城した福島正則は城下町の整備を進め、城郭の北を通っていた西国街道を西に貫通させ、街道に沿って町人町は拡大東西方向の「横町型」となりました。またに向けて出雲石見街道も分岐し、東西のを集中配置し治安維持に利用されました。(1600)年に49万石の入城した福島正則は城下町の整備を進め、城郭の北を通っていた西国街道を西に貫通させ、街道に沿って町人町は拡大東西方向の「横町型」となりました。またに向けて出雲石見街道も分岐し、東西のを集中配置し治安維持に利用されました。

(1619)福島氏改易後に42万石の城主野長晟から12代にわたって広島藩は代が続きました。商業や交通の発達などみが完成し、干拓により城下も南に伸び九州で最大級の城下町となりました。り城郭が本来の役目を終えると、城下町はを受け入れ、陸軍の施設や練兵場の設置、てなどによって都市の景観は大きく変わり暴後の復興事業や経済の発達などで現在なりました。

大絵図で広島城や縮景園をはじめ、本通り現在に残る城下町の面影を眺め歩いて

今いふ城広治

今は消え去った昔の町名は、その時代に
いきいきと暮らす様子が目に浮かぶようだ。
城下の町人町は、白神・中通・新町・中島
・広瀬の五つの組に分けられそれぞれ大年寄
を置いて町方の行政を行っていました。

各町の表記は「芸藩通志」文政8年(1825)による

白神組

一丁目	白神	六丁目	細工町
二丁目	尾道	町	町
三丁目	塩屋	町	町
四丁目	紙屋	町	横横
五丁目	猿	町	町

中通組

新町組

川町石見屋町稻荷町下組
町町橋本町稻荷町中組
御堂京橋町稻荷町東組
(半)屋新愛宕町稻荷町猿猴
山東柳町西組町橋町

中島組

本町 天神町 中島新町
木町 木引(挽)町 元柳町

廣瀬組

本町 堺町四丁目 西引御堂町
一丁目 猫屋町 鎌冶屋町 手町
二丁目 油屋町 土西寺町
三丁目 十日市町

は「広島本川川ぎらえ町中砂持加勢図」に表現されている町名。

は、土砂の流入により川床が埋まり水運に支障をきたすため重要な作業で、12年(1862)に行われた「本川かわざらえ」は、5月7日～9日、11日～13日の「持加勢」と称して50余りの町が日ごとに分かれて山車を仕立てて行列を行きました。その様子は「広島本川川ざらえ町中加勢図」にこされています。